６．書評

「日本経済の底力
〜臥龍が目覚めるとき〜」
（ 中公新書 ）

著者：戸堂康之
出版：中央公論新社
発行：2011年８月25日



今、日本経済にとってグローバル化がいかに大事かを取り上げている本といえる。

本書は、東日本大震災後の日本を立て直すにはどうすれば良いかについて、以前に戻るのではなく、復興とセットになった新たな成長が必要で、産業集積に関する空間経済学の考え方や、ＴＰＰの本質までをわかりやすく説き明かし、まだ眠っている日本の力を最大限に生かす道を明解に示すとともに、日本経済や東日本大震災後の東北地方の問題点と可能性に迫った力作である。

そして「災害が多い国の方が長期的には経済成長が高い傾向にある」と指摘している。それは大きな自然災害（戦災）は、それを期に古い生産設備や技術の基盤が新しいものへと更新され、かつ社会制度も変化することが多いからである。

著者は、東北地方に優遇税制の特区を設け、外資を含め投資を呼び込み、産業を集積し、グローバルな競争力をもつ産業を育て、その集積はコミュニケーションを活発化し「文殊の知恵」を生み出すと言う。

経済や景気のあり方に関する議論において、相変わらず「内需拡大」論が幅をきかし、「貿易依存体質からの脱却」論を伴なっている。

しかし、本書では「日本の輸出額の対ＧＤＰ比は15・６％であり、主要先進国で最低レベル」であると説明している。また「すでに日本よりはるかに企業が外国にでている主要な先進国」で、経済の空洞化が叫ばれるような事実もないとも説明している。大切なのは事実を踏まえた議論である。

著者がデータで示すように、海外との取引を行っている企業の成長は、行っていない企業よりも大きいのが実際である。臥龍企業は特区に参入し、積極的に貿易し世界に羽ばたくと良いと指摘している。韓国もグローバル化に向けて日本より一歩先んじているように見える。

終章の日本人の底力では、「一つは、企業のグローバル化である。日本が輸出大国というのは間違いで、日本は貿易や海外直接投資から見ても、先進国で最もグローバル化していない国の一つである。

しかし、企業はグローバル化することによって生産性を上げ、競争力を伸ばしていくことができるため、日本企業のグローバル化が低調であることが、日本経済が他国に後れをとっている原因になっている。だから、ＴＰＰをはじめとするＥＰＡ（経済連携協定）を外国と結んで、同時に企業を海外市場とつなげる支援策をも実施することで、貿易や投資を活発化して大幅なグローバル化を進めることが必要だ。

もう一つは、地方の産業集積の創出である。地域に産業が集積することで、経済活動が効率化して経済成長は促進される。しかし、日本は東京一極集中で、被災地東北を含む地方に十分に産業集積が育っていない。地方に元気がないのが、日本経済の成長の阻害要因になっている。だから、東北をはじめとする各地に特区を設置し、大胆な税制優遇、規制緩和をするとともに、企業、大学、自治体とのネットワークを強化する施策が必要である。」とまとめている。

しかし、この本ではグローバル化やＴＰＰの問題をもう少し掘り下げて、それぞれの詳細な定義の差異（ＷＴＯ・ＥＰＡ・ＦＴＡ・ＴＰＰ）と世界のグローバル化の歴史的背景・経過や課題とＴＰＰの課題（農業・金融・サービス・人の移動）を踏まえて、もう少し多角的な視点で書かれていれば更に良いと思った。規制緩和による金融のグローバリゼーションはアジア通貨危機やリーマンショックを引き起こしたからである。また、円高による産業空洞化の影響と防ぐ方法についてもう少し説明会がいるのではないか。

兵庫県立長田商業高等学校
校長　南谷雄司